

蟬しぐれ

大森 海太

二ヶ月程まえ、今のマンションに越してきて驚いたことのひとつは、セミの鳴き声である。

毎晩酒を飲んでそのまま寝てしまうので、朝は早くから目が覚める。寝るのにも飽きて起き上がり、外の空気を入れようと居間の窓を開けると、耳をつんざくばかりに聞こえてくるのがセミたちの大合唱だ。

以前の家にはいくらかの木があったものの、セミの声を聞くことはめったになく、もう都会にはセミはいなくなってしまったのかとさえ思っていたが、そんなことはなかった。南西向きの窓の向こうは伝通院の墓地で、あいだに目隠しの木立があつて、そこが彼等の住みかになつているらしい。

「みーん、みんなみんな・・・」皆んなで懸命に鳴き声を競い合っている。かと思うと、ふっと声がやむ。しばらくしてまた再開。どうやら統率が取れているようだ。

それにしてもセミとは不思議な虫である。モノの本によると、卵からかえって幼虫となり、土の中で七年くらい過ごし、ようやく羽化し

て成虫となり、真夏の木にとまって声をかぎりに鳴きまくり、一ヶ月足らずで一生を終えるのだそうだ。つまり我々の目や耳に触れるのは、死ぬまぎわの最晩年であるが、このときが一番立派な姿をしている。交尾をして子孫を残すのもこの最終の時期である。マンションの外廊下などにセミの死骸が落ちていたのを見かけるが、そのまま標本にしてもいくらいの雄姿である。

これに比べると人間の場合はどうだろう。幸いにして大病や事故にあわずに天命を全うする人は、背は曲がり歯は抜け落ち(毛も抜け)、身体はしぼんで消え入るようにこの世を去るのである。このような終わり方がいいのか、最後までがんばるのがいいか。

「みーん、みんなみんな・・・」夕方になつても鳴き声はやまない。夏の風物詩ではあるが、悲壮感も漂う。

暮れてなお命のかぎり蟬しぐれ

以前の某宰相の句である。企業OBペンクラブの勉強会もなにやら蟬しぐれみたいなものだ、と言ったら言い過ぎかな？

(八〇五字)